



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

世界の文学

24

モーパッサン

女の一生

小佐井伸二訳

死の如く強し

宮原信訳

短篇 6 篇

中央公論社

世界の文学 24

©1963

モーパッサン

訳者 小佐井伸二
宮原信

昭和38年5月12日初版発行

昭和44年3月20日31版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

女の一生

3

死の如く強し

219

短篇

墓おんな

461

牧歌

470

ベルト

476

夜

487

仮面

493

謎

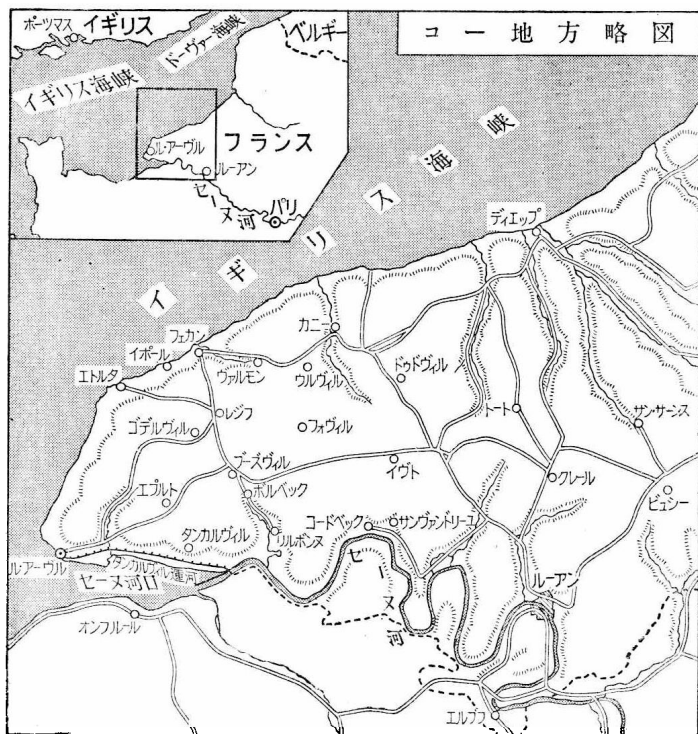
504

年 解
譜 說

541 520

女の一生

——ささやかな真実——



ジャンヌは荷作りを終えると、窓に近寄った。が、雨はまだやんでいなかった。

豪雨は夜どおし窓ガラスや屋根を打ち鳴らしていた。水をふくんだ低い空は、はり裂けて、大地にどつと水をあげ、大地を粥状にかきまぜ、砂糖のように溶かすかに見えた。突風が重たい熱をはらんで過ぎた。氾濫した溝川の唸り声が人気のない街路にみち、家々は海綿のように湿気を吸い、それが家の内部にしみとおって、地下室から屋根裏部屋にいたるまでの壁という壁に汗をかかせた。

前日に修道院を出たジャンヌは、ついに永久に自由の身となって、久しく夢みていた人生のあらゆる幸福を今こそつかまえようとみがまえていたのだが、晴れなければ父が出発をためらうのではないか、それが心配で、朝からもう百回も地平線をうかがっているのだった。

それから、彼女は、旅行鞆に曆を入れるのを忘れていたことに気づいた。月々に区分され、そして模様のま

なかに金文字で一八一九年というその年の年号が入っている小さな厚紙を、彼女は壁からはずした。それから鉛筆で最初の四欄を消した。五月二日までの聖者の名にひとつひとつ棒を引いて。五月二日、それは、彼女が修道院を出た日である。

扉の後ろで、声がした。「ジャンネット!」

ジャンヌは答えた。「どうぞ、パパ」そこで彼女の父が入って来た。

シモン・ジャック・ル・ペルチュイ・デ・ヴォー男爵は前世紀の貴族で、偏屈でお人好しだった。ジャン・ジャック・ルソーの熱狂的な崇拜者である彼は、野や森や動物など、自然に対して恋人のような愛情をもっていた。生まれながらの貴族であった彼は、本能的に九十三年の革命を憎んでいた。が、氣質的には自由思想家で、しかも受けた教育は自由主義的だったから、専制政治はきらっていた。とはいえ、そのきらい方は、毒にもならない口先だけのものだった。

彼の長所でもありまた短所でもあったのは、善良さである。愛撫したり、与えたり、抱擁したりするだけの力をもたない善良さ。散漫で、抵抗力がなく、意志の神経麻痺ともいうような、造物主の善良さ。それは力の欠如であり、ほとんど悪徳だった。

理論家の彼は、娘の教育についてあらゆる計画をたて

た。彼女を幸福に、善良に、まっすぐに、またやさしい女に仕立てたいと思つて。

彼女は十二歳まで家におかれ、それから、母親の涙にもかかわらず、聖心会修道院に入れられた。

男爵は娘をそこにきびしく閉じこめておいた。俗世間からは知られず、また俗世間を知らさずに。彼は娘が十七歳になったら彼女を純潔なまま返してもらいたいと思つていた。彼自身の手で彼女をいわば正しい詩の浴槽でゆあみさせるためである。野で、豊かな大地のふとこゝろで、素朴な恋とか動物たちの無邪気な愛情とか生命の清らかな営みとかをまのあたりに見せて、彼女の魂を開き、彼女の無知をただすためである。

彼女はいま修道院から出て来た。輝き、生氣と幸福への欲求とにみちて。昼のつれづれや夜の所在なさや期待にあふれた孤独のなかで、彼女の心がすでに思ひえがいていたあのすべての喜び、あのすべてのすばらしい冒険を待ちかまえて。

彼女はヴェロネーズの肖像画に似ていた。肌にまでその色が移されたかとも見えるつややかなブロンドの髪。ほのかにぼら色がさし、日の光に愛撫されるときかすかに認められる蒼白いピロードのような軽い座毛でばかされた、貴族的な肌。目は青く、しかもその青はオランダの陶器の人形の目に見られる不透明なあの青だった。

彼女は左の小鼻に小さなほくろを一つもつていた。ま一つのほくろが右側、顎の上にあつて、そこには、皮膚とほとんど見わけられないほどよく似た数本の毛が縮れていた。背は高く、胸は成熟し、腰の線が波打っていた。はっきりした声は、ときに鋭すぎるようにも思われたが、こだわりのない笑いは彼女のまわりに喜びをまいた。しばしば、それが癖で、彼女は髪をなでつけるためにように両手をこめかみにもつていった。

彼女は父のそばへかけ寄ると、彼を抱いて接吻した。「それで、出かけるの？」と彼女は言つた。

彼はほほえみ、かなり長く延ばしたすでに白い髪をふつた。そして、窓の方へ手を上げながら、「こんな天気におまえはどうして旅をしたいんだね？」

しかし彼女はせがんだ。甘えて、やさしく。「ねえ、パパ、出かけましょうよ、ね、お願い。午後にはお天気になるわ」

「だが、おまえのお母さんが承知しないだろうよ」

「承知なさるわ。きつと、よ。私にまかせて」

「おまえがママを説き伏せたら、わたしの方は喜んで出かける」

そこで彼女は男爵夫人の部屋へ走って行つた。彼女は今日の出發をつのる思いで待ちこがれていたのだ。

聖心会修道院に入ってから、彼女はルーアンを離れたことがなかった。父が、彼のきめた年になるまで、彼女にどんな気晴らしも許さなかったからである。ただ二回、パリへ二週間ほど連れて行ってもらったことがあったが、しかしパリはやはり都会だった、彼女は田園をしか夢みていなかった。

が、今は、彼女はレ・ブールルの彼らの所有地へ夏を過ごしに行くのだ。それはイボールのそばの断崖の上に建てられた一族の古い館で、彼女は海辺のあの自由な生活に無限の喜びを期待していた。それに、その館は彼女に与えられたもので、結婚したら彼女はずっとそこに住むことになっていた。

そこで、昨夜からたまえなく降りつづく雨は、彼女の人生の最初の大きな悲しみの種となっていたのである。けれども、三分後には、彼女は母の部屋からとび出して来ると、家じゅうに声をひびかせて叫んだ。「パパ、パパ！ ママは出かけてもいいって。馬をつけさせてちょうだい」

豪雨はいっこうに衰えなかった。それどころか、四輪馬車が玄関につけられたときにはさらに激しくなったようにさえ見えた。

ジャンヌは車に乗ろうとした。そのとき、男爵夫人が階段を降りて来た。一方を夫に、片方を男の子のように

強壯で姿のいい背の高い小間使にささえられて。それはコー地方出のノルマンディ娘で、せいぜい十八歳にしかなくていなかったけれども、少なくとも二十歳には見えた。彼女は家族のなかで娘のように取り扱われていたが、それというのも彼女がジャンヌの乳姉妹だったからである。名前はロザリといった。

そして、彼女の主な役目は、心臓肥大症のために数年来すっかりふとってしまつて、それをたえずこぼしている女主人の歩行を助けることだった。

男爵夫人は、息をきらしながら、やっと古い館の玄関の階段にまでたどりつくと、雨水が川のように流れている庭を眺めて、つぶやいた。「まったく正気の沙汰じゃありませんよ」

彼女の夫は、相変わらずほえみながら、答えた。「あなたが出かけるっていったんだよ、アデライド夫人」彼女はアデライドという華やかな名前をもっていたので、男爵はからかい気味の尊敬をよそおって、いつもそれに「夫人」をつけて呼んでいた。

それから彼女はふたび歩きだし、やつとのことで馬車に乗ったが、そのとたん馬車のばねがみんな曲がった。男爵は彼女の横にすわり、ジャンヌとロザリとは後ろ向きの座席に席をとった。

料理女のリュジヴィーヌが外套をまるめて持つて来た。

みなはそれを膝^{ひざ}にかけ、つぎに運びこまれた二つの籠^{かご}は足の下にかくした。それから、彼女は御者台のシモン爺^{おやじ}さんのかたわらによじのぼり、大きな毛布を頭からすっぽりかぶった。門番夫婦が門を閉めかたがた挨拶^{あいさつ}をしに來た。彼らは、あとから荷車で来るはずになっている荷物について、最後の注意を受けた。そして、出発となった。

御者のシモン爺さんは雨に打たれて頭を下げ、背をまるめ、三枚襟^{さんまいえり}の外套にすっかりくるまっていた。突風がうなつて窓ガラスをたたき、往來を水びたしにした。

馬車は、二頭の馬の早足にまかせて、河岸におり、大きな船の列に沿って走った。その帆柱や帆げたや綱具は、雨足の濃い空のなかに、さながら葉の落ちた木々のように、悲しげに立っていた。それから馬車は、モン・リブーデの長い大通りにさしかかった。

ほどなく牧場をいくつか横ぎった。ときどき、雨にぬれた柳が、死骸^{しかい}のようにぐったりと枝をたらし、もやのなかに重々しく浮かび出た。馬どもの蹄鉄^{てつてつ}は水をはね、四つの車輪は泥の輪となった。

みなは黙っていた。心までも大地と同様に湿っているようだった。ママはのけぞって頭を後ろにもたせかけ、まぶたを閉じた。男爵はものうい目つきでぬれそぼつた単調な野原をみつめていた。ロザリは膝の上に包みをの

せて、下層階級のひとに特有のあの動物的な物思いにふけていた。しかしジャンヌは、この生暖かい雨しぶきの下で、ちょうど閉じこめられていた植物が外氣にあてられたときのように、自分がよみがえるのを感じていた。喜びの厚みが、葉ごもりのように、彼女の心をもの悲しさから保護してくれたのである。彼女は、話しはしなかつたけれども、歌いたくてたまらなかつた、外に手を出して、そこにたまる水を飲んでみたくてたまらなかつた。彼女には、馬の早足に運ばれて行くことが、荒涼とした風景を見ることが、そしてまたこんな大雨のさなかにありながら自分を安全に感じるものが、ほんとうに楽しかつた。

雨の降りしきるなかで、二頭の馬のぬれて光る尻^{しり}が湯気をたてていた。

男爵夫人は徐々に眠りにおちていった。たれ下がった六本の、整った螺旋状^{らせんじょう}の巻き毛にふちどられている彼女の顔は、少しづつかたむいて、首のまわりの大波のような三つのくびれで力なく支えられ、そのくびれの最後の波は彼女の胸の大海のなかに消えていた。頭は、息を吸うたびにもち上げられるが、すぐにまた落ちる。頬がふくらんでは、半ば開いた唇のあいだから高いびきがもれる。夫は妻の方へ身をかたむけて、彼女のゆたかにふくらんだ腹の上に組まれている手の中に、そっと小さな



革の紙入れをおいた。

この感触が彼女をめざめさせた。彼女は、眠りを中断されたひと特有のあのぼんやりとした様子、どんよりとした目つきで、その物をみつめた。紙入れは落ちて、口をあけた。金貨や紙幣が馬車の中にちらばった。彼女はすっかり目をさました。娘の陽気さが笑いの花火となつて爆発した。

男爵は金を拾い集めて、それを彼女の膝の上におくと、「これがね、おまえ、エルトのわたしの農場から残ったすべてさ。あそこをレ・プールの修繕のために売ったんだ。レ・プールにはこれからたびたび住むことになるだろうからね」

彼女は六千四百フランを数えて、それからそっとかくしに収めた。

それは彼らの両親が残してくれた三十一の農場のうちの、こうして売られた九番目の農場だった。が、それでもまだ、彼らは年におよそ二万リーヴルは上がる土地を所有していて、それは、うまく管理しさえすれば、楽に年三万フランは上げたことだろう。

彼らは簡素な暮らしをしていたから、もしも家のなかに底なしの穴が常に口をあけていなかったら、この収入でじゅうぶんだったはずだ。底なしの穴とは、すなわち善良さで、それはちょうど太陽が沼地を干あがらせるよ

うに彼らの手から金を涸らしていた。金は流れ、逃げ、消えた。どのようにして？ だれにもわからなかった。いつも夫妻のうちどちらかが言うのだった。「どうしてだかわからないのだが、何もないものを買わないのに、今日も百フランつかってしまった」

それに、そんなふうに無造作に与えるということは彼らの人生の大きな幸福の一つであった。そしてこの点については、彼らはすばらしい感動的なしかたでお互いに了解し合っていた。

ジャンヌがきいた。「きれいかしら、いまでも、私のおやしき？」

男爵は陽気に答えた。「いずれわかるさ、ちびさん」

それでも、すこしずつ雨の激しさはおさまっていった。やがてそれはもう一種の霧、飛び舞うきわめて細かなぬか雨にすぎなくなつた。雲の天井が高くなつて、白んできたように見えた。と、突然、それまで見えなかった孔から、長い日の光がひとすじなめに牧場の上に射した。雲が切れて、大空の青い地が現われた。やがて、その切れ目は幕が裂かれるように大きくなり、そして鮮やかな、深い、紺碧の、清澄な、美しい空が下界の上にひろがった。

さわやかな、やさしい風が、大地の幸福な息吹きのように、過ぎた。庭園とか森とかに沿って行くとき、羽を

かわかしている小鳥のするどい歌声がときとして聞こえた。

夕暮れがおとずれた。みなはいま馬車のなかで眠っていた。ただジャンヌをのぞいて。二度、旅籠屋の前で止まって、馬に一息つかせ、水といっしょに燕麦をすこし与えた。

太陽はすでに沈み、遠くで鐘が鳴っていた。ある寒村で角灯に火を入れた。空にもまた点々と星くずがともった。あかりのついた家がところどころに現われては、一点の火となつて闇を貫いた。と、突然、丘の背後から、櫓の木立をすかして、月が、赤い、大きな、まだねむそうな月が、浮かび出た。

暖かかったので、ガラス窓はおろされたままだった。ジャンヌは、夢みることに疲れ、幸福の幻を追うことに飽きて、いまはまどろんでいた。一つの姿勢を長くとっているために、からだがしびれて、ときどき目があいた。そんなとき、彼女が外を眺めると、月明かりの夜のなかに、農場の木々が過ぎたり、野のあちこちにねそべっている牛が頭をもたげたりするのが見えた。それから、彼女はいろいろと姿勢を変えてみた。見かけていた夢のつづきを追おうとしてみた。が、たえまない車のひびきが耳につき、頭が疲れた。そこで彼女はふたたび目を閉じたが、自分が身心ともにすっかり疲れきっているのを

感じた。

そのうちに馬車が止まった。大勢の男女が灯を手にして馬車の昇降口の前に立っている。着いたのだ。ジャンヌはとっさに目をさまして、すばやく跳び降りた。父とロザリが、小作人の一人に足もとを照らしてもらいながら、男爵夫人をまるで荷物のように運んでいった。彼女はすっかり疲れはてて、苦痛を訴えながら、しかもたえず絶えいような小声でくりかえしていた。「ああ、やれやれ、おまえたちや！」彼女は飲もうとも食べようともせず床に入り、そしてすぐに眠ってしまった。

ジャンヌと男爵はさし向かいで夜食をとった。

彼らは互いに顔を見合せてほほえんだり、テーブル越しに手を握り合ったりした。そして二人とも子供らしい喜びにとらえられて、修繕のできた邸内を検分にしかけた。

それは、農家とも邸宅ともつかぬあのノルマンディ特有の高く大きな住居の一つで、灰色に変色した白い石で建てられ、一族を容れるにじゅうぶんなほど広かった。

広い廊下が家を二分して端から端へ通り、前後二つの正面に大きな戸をあけていた。階段がこの入口をさながらまたぐように二つにわかれて、真ん中に空間を残しながら、二階でその先を橋のようなかっこうに結びつけていた。

一階には、右手にとほうもなく大きな客間があつて、そこには鳥たちが遊んでいる葉ごもりを描いた壁掛けがかかつていた。細目針のつづれ織を張った家具はみな、そのままでラ・フォンテーヌの『寓話』の挿絵だった。ジャンヌは、ほんの子供のころ好きだった椅子を見つけて、喜びに胸をときめかせた。それは狐と鶴鳥の話を表わしているものだった。

客間のわきには古い書物がいっぱいまつた図書室と、ほかにもう二つ、使われていない部屋とがついていた。左手には、新しい板に張り換えられた食堂と、下着類置場と、配膳室と、台所と、そして浴槽ゆたくつきの小部屋とがあつた。

一本の廊下が二階全体を縦に切っていた。十の部屋の十の扉がこの廊下に面して並んでいた。その一番奥の右側に、ジャンヌの部屋があつた。彼らは中に入った。男爵が、使わずに屋根裏部屋にほうりこんであつた壁掛けと家具とを利用しただけで、部屋の模様替えをさせたばかりだった。

オランダ製の非常に古いいくつかの壁掛けが、この部屋を風変わりな人物たちでみたしていた。

しかし、自分の寝台を見つけると、少女は歡喜の叫びを上げた。四隅で、蠟光りのする真っ黒な柏材かしきの大きな鳥が四羽、床を支えているところは、さながら寢所

の番人といったふうだった。側面には花と果実との大きな花飾り模様が彫つてあつた。そして、精巧な溝のついた四本の柱が、それらはコリント式の柱頭をいただいて、いるのだが、ばらとキューピッドとのからまり合う軒蛇腹けんへつをもち上げていた。

寝台は記念碑のように立っていたが、しかし歳月によつて黒光りする木肌のいかめしきにもかかわらず、あくまでも優雅であつた。

寝台掛けと天蓋てんがいとは、さながら二つの天のようにきらめいていた。それらは濃紺の古代網で作られていて、ところどころに金糸で縫いとられた百合の大輪おほりんを星のようにちりばめていた。

その美しさをすっかり満喫したとき、ジャンヌは灯をかかげて、壁掛けをあらため、その画題を理解しようとした。

若い貴族の男と若い貴婦人とが、緑と赤と黄との世にも奇妙な服を着て、白い果実のみのつた青い木の下で語らっている。果実と同じ色の大きな兎うさぎが一匹、灰色の草をすこしかじっている。

人物の真上に、そこが遠景ということになるわけだが、尖った屋根の、まるい小さな家が五つ認められ、さらにその上、ほとんど空のなかに、真っ赤な風車。

花々をかたどった模様がそれらすべてのあいだをはい

まわっている。

次の二つの壁面ははじめのものと非常によく似ていたが、ただ違っているところは、オランダ人ふうの着物をきた四人の小さなお爺さんおやさんが家々から出て来て、極度の怒りと驚きとのしるしに、腕を天に上げているのが見られることだ。

しかし、最後の壁掛けは一場の悲劇を表わしていた。相変わらず草をかじっている兎のそばに、青年が倒れている、死んでいるようだ。若い貴婦人が、彼をみつめながら、自分の胸に剣を突きさしている。そして木の実は黒くなっていた。

ジャンヌは理解することをあきらめかけていた。そのとき、彼女は、片隅に一匹のごく小さな動物を発見したのだ。ごく小さくて、もし兎がほんとうに生きていたらそれを食べてしまったことだろうが、しかしそれでも、これはライオンだった。

ようやく彼女は、それがピラムとチスベの不幸な物語＊であることを知った。そして、意匠いしょうの素朴そぼくさには笑いをさそわれたけれども、自分がこのような恋の冒険の図の

＊ 訳注——ローマの詩人オウィディウスの物語。チスベが桑の木の下でピラムを待つところへ、ライオンが現われる。彼女はウ

エールをすてて逃げる。ライオンに引き裂かれたヴェールを見て、ピラムは愛人が殺されたと思ひ込み自殺する。引き返して来たチスベもあとを追って死ぬ。その後桑の白い実は黒くなった、という。

なかに閉じこめられていることをうれしく思った。それはたえず自分の思いにさまざまなつかしい希望を語ってくれることだろう。夜ごとに、自分の眠りの上に、あの遠い昔の伝説の愛を舞わせてくれることだろう。

そのほかのあらゆる家具は実にさまざまな様式を集めていた。それは、それぞれの時代が家族のなかに残してゆいたぐい家具で、そのために、古い家はあらゆるものが雑居している博物館のようなものとなる。まぶしいばかりの銅の金具でおおわれたみごとなルイ十四世時代のたんすが、いまなお当時の花模様の絹をかぶせた二つのルイ十五世時代の脇掛椅子ひだりいすのあいだにおかれ、ばらの木の机は、まるいガラス蓋ふたのなかに帝政時代の置時計を見せている暖炉だんろ棚たなに向かい合っていた。

その時計は、金色の花々の園そのの上に四本の大理石の円柱で吊るされた、青銅の蜜蜂みつばちの巣をかたどっていた。細長い割れ目から巣の外に出ているぎやしゃな振り子が、この花園の上に、七宝しちほうの羽をもつ一匹の可愛らしい蜜蜂を永久にとびまわらせている。

文字板は彩色された陶器製で、巣の側面にはめこまれていた。

それが十一時を打ちはじめた。男爵は娘に接吻ちゅうぶんすると、自分の部屋にひきあげた。

そこで、ジャンヌは、心を残しながら、床についた。

最後にもう一度、部屋を見まわして、それから彼女はろうそくを消した。しかし、寝台はただその頭の方だけが壁についていて、左手には、窓があり、そこから月の光が潮のように流れこんで、床の上に光の水溜まりをひろげていた。

月光は壁に反射して、その蒼白い反射がピラムとチスベの動かない恋の姿を弱々しく愛撫した。

足もとの方の窓から、やわらかな光を全身にあびた高い一本の木が認められた。ジャンヌは寝返りをうって、目を閉じたが、すぐにまたあけてしまった。

彼女はまだ馬車の動揺によってゆられているように感じたが、事実その車輪の音がなれば彼女の頭のなかで鳴りつづけている。彼女ははじめ動かずにじっとしていた。こうして静かにしていれば、しまいには眠れるだろうと思つて。けれども、心のいらだちは、すぐからだ全体をおかしていった。

脚が痙攣し、熱が上がった。そこで、彼女は起きあがると、足も腕もあらわに、彼女を幽霊のように見せる長い寝間着のままで、床の上にひろがっている光の沼を横ぎり、窓をあけて外を眺めた。

夜は明るくて、まるで真昼のようによく見えた。そこで、若い娘は、かつて幼年時代に愛していた、このあたり一帯を、ことごとく認めた。

まず、彼女の正面に、夜の光の下でギタのように黄色く見える芝生。二本の巨木が館の前に歩哨のように立っていた。北側のはすずかけで、南側のは菩提樹である。

この広い芝生のひろがりの果てに、茂った小さな森があつて、そこがこの屋敷のはずれだった。この屋敷は沖から吹いてくる突風から五列のにれの老樹で保護されていたが、そのにれの木々とはいえば、年じゅう吹きつける潮風のために、ねじれ、そがれ、噛まれ、屋根のような傾斜をつけて刈りこまれていた。

この囲い地は、左右がともうもなく高いポプラの長い並木道で区切られていた。ノルマンディではポプラのことをブーブルと呼ぶが、そのブーブルの並木道が主人たちの住居とそれに隣接した二つの農場とをへだてていてその一つにはクイヤール一家が住み、いま一つにはマルタン一家が住んでいた。

このブーブルが館にその名を与えていたのである。この囲い地の向こうには、はりえにしだがまばらに生えている未開墾の広い野がひろがり、そこを潮風が昼となく夜となく吹きまくっていた。その先は、いきなり斜面がつきて百メートルほどの白く切りたつ断崖となり、その裾を波が洗っていた。

ジャンヌは遠く、木目模様の果てしのない海の面をながめていた、それは星くずの下で眠っているように見え